



合掌するところ

東日本大震災から七年になりました。少し離れた土地に住む我々にも、あの日の経験したことのない揺れ、度重なる余震の恐怖、凍える寒さ、停電の町の暗さは忘れられないものです。

去る11日には仏教でいう七回忌を迎え、地震が起こった時間に合わせて追悼が各地で行われました。その中に、防波堤に並んだ多勢の老若男女が海に向かって静かに手を合わす姿があり、あらためて手を合わせるとい合掌の深い意味を味あわせていただきました。

それは、みんながあの日そのままに寒さをしのぐ防寒着で並び、指示されてでもなく、号令をかけられたのでもなく、また前にお墓や位牌があるのでもない。地震が起こった時間が知らされると同時に私語が止み、幾多の命を奪った津波がやってきた海に向かって静かに手を合わせる姿でした。その姿にすべてを受け入れた人々の穏やかさと美しさを感じました。

* * *

合掌するという行為は、単なる作法ではありません。いくら愛しく名残惜しく思っても助けることはできない不条理を知り、自分は生かされて今ここにいるといういのちの真理を受け止め

た姿です。

愛する人の命を奪った海、命からがら逃げ延びた体に襲いかかる凍える自然の厳しさ、しかしそれらを逃れて生かされているいのちの重さ、そのことを教えてくれた亡き愛しい人たち…。それらをきちんと受け入れなければ真の安らぎはありません。

あの防波堤に並んだ人たちがみなきちんと意識できていなくてもいいのです。亡き人と自分との繋がりから心の安穩を得るという育まれた感情の表れが、自らの手を合わすという行為なのだと思いました。

私たちの教えは仏さまに向かって手を合わせるとき、手を叩いたり、こすり合わせたり、リンや鈴をを鳴らしたりせず、自然に頭を垂れ静かに手を合わせます。合掌は、現実（真理）から目を背けず受け取りました、という「領解（りょうげ）」から生まれるものだからです。

礼装で正装し、立派な祭壇を設え、立派な言葉を捧げる追悼式より、あの大災害の中を生き延びた方々、その後生まれた子供達、あらゆる人々が生かされているままに静かに手を合わせる姿に、仏となられた亡き方々は何より喜ばれ安心されたことでしょう。

* * *

現在は人が亡くなるとお医者さんが死亡診断書を書いて下さ

りはじめて法的にご遺体が「死体」となります。しかし、すぐにはただの死体とは思えないのが家族の情というもの。亡くなられた方はすでに仏になったとわかっていても、残された者の断ち切れない思いから「中陰」が説かれ、四九日をもって満中陰、その後続く「百か日」は、「卒哭忌（そつごくき）」といいます。声を上げて泣くことを卒業するという意味です。そろそろ泣くような悲しみから卒業して、力強く生きている姿をこそ、亡き人が願っていることであり、安心していただけることなのですよと、遺族の心を解き放ってくれるのです。七回忌は満六年で干支の半回り、十三回忌は干支が一回りしたのだねと、故人がお浄土に生まれた仏としての年齢を偲ぶのです。

お彼岸などの仏事は、仏の教えに生きた人々の智慧です。亡き人と私たちを結び、後生を案じることなく人生を歩む生き方を学ぶ場として伝えて下さった深い人間性の文化であり仏教の教えに沿った習慣なのです。

その縁に会い仏に向かうということは、普段は私たちの心を縛り付けているものに気付かされ、解き放ってくれ、私の前に心豊かな世界を開かれていきます。そのとき私たちは思わず静かに手を合わすのでしょ

合掌

奏庵法座
彼岸会

日時
3月26日(日)

午前11時～

「み仏に抱かれて」

阿弥陀経

住職法話

「恩徳讃」

～*～

おとき

お彼岸の準備を促すようにウグイスが啼き出しました。時に過酷な試練を教える日本の自然環境や気候ですが、それだからこそ気づかされる、多くの恵みへのご恩といのちの真理です。力強く生きた先人たちから繋がってきた智慧の深さに「そうであったな」と素直に頷かされる尊い仏縁です。永代経法要に続いての集いですが、どうぞお参り下さい。お待ちしております。



お礼とお願い

去る17日、春の「永代経法要」を厳修させていただきました。お送りいただいたご懇志、お供えは仏前にお供えさせていただきました、おかげさまで春らしい暖かさの中、お参り下さった皆さまとともに和やかに勤めさせていただきました。

ありがとうございました。

また、先月の便りで、度々のコンピューターの不都合により、かなであん便り発送住所録の新旧が入り混って配達されてしまっていることを載せさせていただきましたところ、ご丁寧なお便りとともにお知らせいただきお手数をおかけいたしました。

おかげさまで何とか新しい住所録を入力することができましたが、以前にお断りいただきながら再度発送しご迷惑をおかけしました方には重ねてお詫び申し上げます。

今後も不具合が発生しないよう扱ってまいりたいと心がけておりますが、もしご不審な場合は遠慮なくご連絡下さい。

「ほとけ」

ほとけは
いろもかたちもましまさず
ただおんはたらきぞ
あらわなる

人間の思考(嗜好)は、個人それぞれ違って当たり前だが、本音は別にあっても、人種、宗教、文化を超えて受け入れようとする一種の「やせ我慢」で律する世界共通の理性を広げたのがグローバル化だった。しかしその痩せ我慢による閉塞感が保守に走らせ崩れつつある。「人間とは煩惱の生き者であり、我が身こそがそうである」と自覚していなければすぐ頭を持ち上げてくる、と聞かされてきた仏の教えの通りだ。■首相の名が絡んでいたが故に注目せざるをえない疑惑。防衛大臣というにはあまりにも危うい資質と思想。何が真実なのかわからない展開だが、決して見逃してはならないことがある。ひたひたと広がる偏った価値観と思想に日本を意図的に向かわせるという怖さだ。■教育の場での排斥思想、「教育勅語」を暗唱する子供たちもその親も、それを必要とした軍国主義の背景も知らない世代。文章の意味も理解もなく賛美する団体に首相や閣僚が同調しているという事実は、かって「神(天皇)の子」の名の下、喜んでお国のために戦うことを教え多くの若者たちの命を捧げさせた日本へと向かっていると見える。アラームの神に殉じて「聖戦(ジハード)」テロに走る国やお隣の独裁者の国と同じ危険な国と思われかねないということだ。■「蛇の道はへび」のへびにとっては蛇の道のみが生きる道だが、人間は道を選択できるはず。それは右でも左でもない中立、中道という選択だ。ブッダは「中道」を悟り、同時にその道のブレずに進むことの難しさも悟られたが、そこに向かおうと律することはできると説いておられる。いつの時代もどの世代でもバランスという安定性が求められている。琴の糸は緩くは音が出ず、張りすぎると切れるとの例えは三千年後の今も真理である。今強化すべきは中道(中立)の道に向かおうとすることではないだろうか。

Norimaru